

「稚魚のゆりかご」アマモ場造成技術研究

環境増養殖担当 和泉安洋

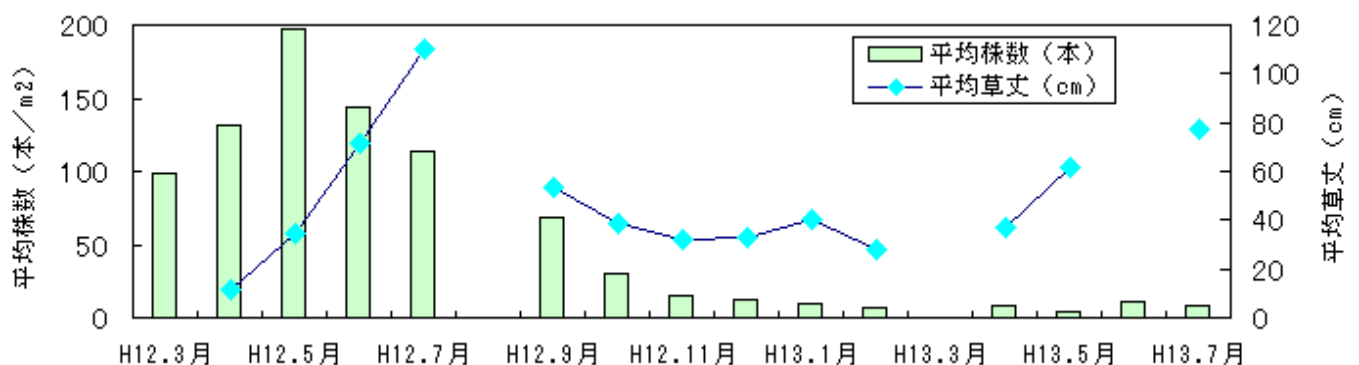
アマモは主に県北から県中央部の波静かな内湾の砂泥域に繁茂し、アマモ場を形成する。アマモ場は、マダイ・カレイ・ヒラメ・クルマエビ・ガザミ・アオリイカなど、水産有用魚介類の稚魚の生育場所となっている。また、水質の浄化機能も備え、アマモ場は海洋生物および海洋環境にとって重要な役割を果たしている。



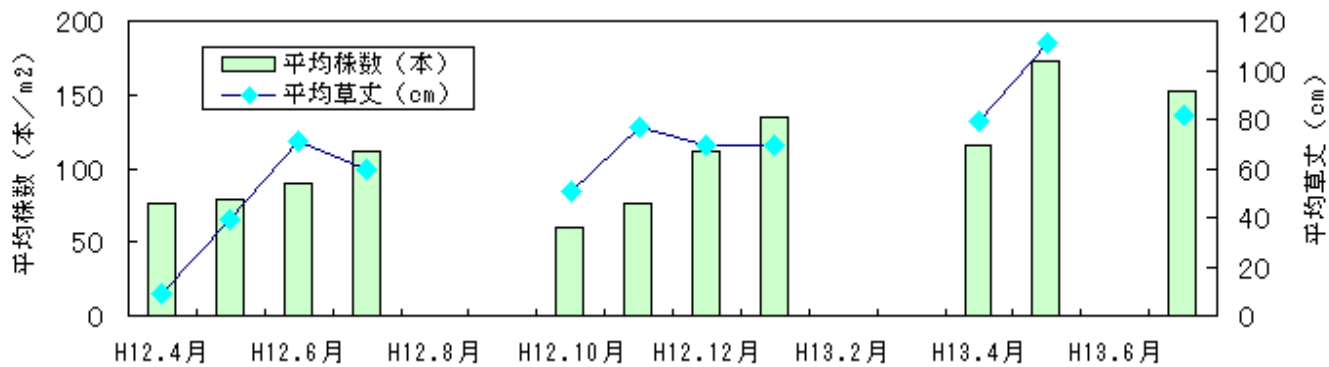
鳴門市小鳴門海峡筋の天然アマモ場

水産研究所では、波浪条件により本来アマモが生息できない海域で、人工的にアマモ場を造成する技術の開発に取り組んできた。

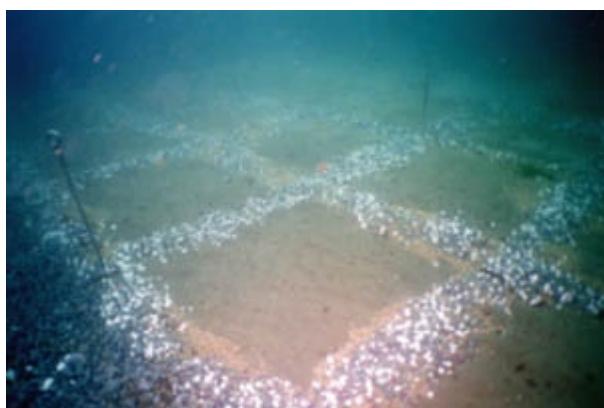
播種袋とガーゼ製マットによる播種方法、粒径の異なる複数種の小石を用いた砂面安定方法などの造成技術の開発により、造成したアマモの越年維持に成功した。比較的波浪の強い鳴門市櫛木地区と比較的弱い阿南市大湊地区で試験的に造成したアマモの株数・草丈の推移と、造成技術の概略を紹介する。



櫛木試験区アマモの1平方メートルあたりの平均株数と平均草丈の推移(平成12年1月造成)



大潟試験区アマモの1平方メートルあたりの平均株数と平均草丈の推移(平成12年2月造成)



波浪による砂面の変動を緩和させるため、粒径の異なる複数種の小石を混ぜ合わせたものを敷設することにより、底質を改良する。



6月頃、種子を得るため天然のアマモ場から花枝を採取する。1本の花枝から約30粒の種子が得られる。約1ヶ月間、陸上水槽で結実を待つ。種子を選別し、翌年の1月まで保存しておく。



6月、成長したアマモ。ガーゼ製マットは自然に分解消滅し、地下茎の生育を妨げること



1月、播種袋を作成する。ガーゼ製の袋に、腐葉土(肥料)と海砂およびアマモの種子を

はない。冬季の波浪に備え、地下茎を覆うよう 混合したものを詰める。
に、再度小石を敷設する。



毎年、6～7月にアオリイカの産卵が見られる。約1ヶ月間でふ化し、秋頃までアマモ場で過ごす。



1～2月頃、潜水作業により造成する。ガーゼ製マットを、海底に並べた播種袋の上に、敷き詰めていく